

Urban Design Lab. Magazine

2015.05.31 vol. 229



受け継がれるべきもの

S o m e t h i n g t o b e t a k e n o v e r

松本まちあるき p.4

倉澤さんの歩み p.6

東京大学

工学部都市工学科 /

工学系研究科都市工学専攻

都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：今川高嶺

編集委員：中島健太郎 高橋舜

中井雄太 黒本剛史 砂塚大河

富田晃史 王誠凱

受け継がれるべきもの

あの先輩はいま、第二弾



今回の特集はマガジン二〇十四年石徹白号に続き、研究室先輩特集の第二弾です。対象は長野県松本市に住み、「都市計画家」として活動している倉澤聡さんです。倉澤さんが関わっている松本のこと、そこで実施している工芸を中心としたイベントのこと、そして、倉澤さんの都市計画家という職能への熱い思いや考え方など、インタビューと松本まちあるきを通して、迫っていききたいと思います。

松本を歩いていると、随所にみられる湧き水ですが、湧き口に工芸のまち・松本ならではの情趣があって、工芸品の壺が取り付けられています。江戸時代では、松本は日本中から集められた名匠たちがたくさん居住する城下町として栄えました。その時代から、地域と工芸の深い繋がりがすでに芽吹き、今や空高くそびえる大樹となって松本を支えていると実感しました。

松本を育んできたアルプスの山々とそれによってもたらされた豊富な地下水資源が松本の顔となり、そこに住む数多くの名匠によって生み出された工芸品と倉澤さんのような故郷に強い愛着を持つ人々が松本に魂を宿しました。その地の環境とその環境によって育てられた人々の精神と技、これらのものこそ、今の時代に生きる私たちが受け継いでいくべきものだと私は思います。



山や水に恵まれている松本はまさに「山水の郷」です。自然豊かな環境の中で、人が集まり、技が生まれ、物ができるといふごく普通の過程を経て、さらに何百年の時の試練を越え、「粹」となるものが誕生します。今、松本の工芸はまさに「粹」そのものです。やがて、その工芸は松本のアイデンティティーとして世に知らされ、まちという大きな環境の中に再び戻り、そこに暮らす人々に潤いを齎します。それを失わないためにも、これから私たち先人から何を受け継いでいくべきなのか、それをどうやって活かしていくのか、真剣に考えることが必要かもしれません。

松本まちあるき

Stroll thorgh the MATSUMOTO

この度、倉澤さんに案内していただきながら、松本訪問メンバー一同が松本駅を出発点とし、松本市の中心市街地を歩いてみました。気持ちの良い青空の下で、初夏の陽気がすでに少々暑く感じましたが、まちの至るところに湧き水や井戸があり、絶え間なく流れてくる涼しげな音とともに、思う存分アルプス山脈に包まれている松本市の街並みを堪能させていただきました。

五月の松本では、「工芸の五月」というイベントが開催されており、まちを歩いていると、職人の技で磨き上げられた多様な工芸品に魅了され、ついつい足が止まってしまうほどです。まちの中では、倉澤さんが色々な人に声をかけられ、まちの事で話し込んだりするシーンが多く、僅かながらも倉澤さんと松本というまちの繋がりがそこに注ぎ込んできた情熱を覗けたと思います。(編集：M1 王)

工芸の五月は、街全体を歩きながら楽しめるイベントなので、「まちを楽しむ」という意味では、松本のような街並みの美しい場所では有効な手法だと感じました。(砂塚)

松本では、工芸が齎した人の賑わいが土地の歴史と現在を結んでいるように感じました。(川田)



▲ アルプス山脈の懐に聳え立つ松本城
松本城に入るために長蛇の列に並びました。アルプス山脈が空の果てまで延々と続き、流れ行く飛雲と聳え立つこの城が400年余りの日本歴史を物語っています。感無量です。

松本市の中心部を流れる女鳥羽川、店先や広場で見かける井戸や湧き水など、街の至る所で水の存在を感じることができ、まちづくりにおいて水が作り出す風景が大切にされていると思いました。(富田)



▲ 倉澤さんとの飲み会
飲み会の席で都市工学全般について、楽しい議論が絶えませんでした。美味しい信州そばもいただきました。1日のまちあるきや取材を通して倉澤先輩の考え方や松本のことをより理解できたと思います。

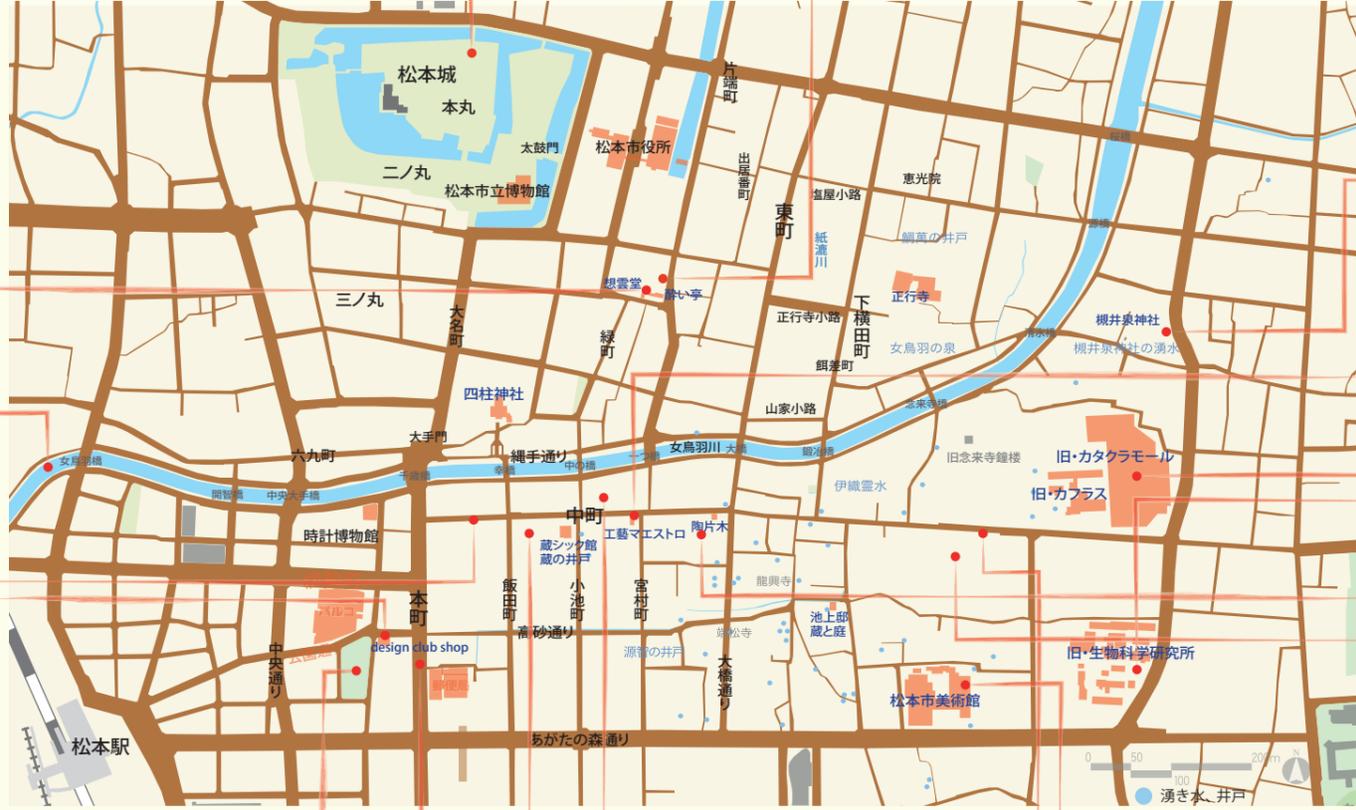


▲ 槻井泉神社の巨木、下に湧き水



▲ 古本喫茶 想雲堂
松本市内一番古い建物らしく、優雅な雰囲気と静かな佇まいが旅人を誘います。

▲ 市内を貫流している女鳥羽川



中町通りでは、白壁となまこ壁の土蔵が立ち並ぶ、時代を遡ったかのような古き松本の風景が広がっている。入り口ではゾーン30を設定し、車道と歩道では違う舗装が用いられています。



▲ design club shop
専門学校の学生が運営する実験店



▲ 松本市のメイン通り・本町通り
倉澤さんがメンバーに松本市の都市計画の歴史を解説している。この本町通りでは建物の統一したファサードと高さ、調和を感じさせる壁面の色合い、セットバックによって作り出された広々とした歩道空間など、都市デザインの工夫も随所に見られました。



▲ パルコ前の広場、ビル空間の見直し改善に効果がありました。

漆器専門店・伊原
中町通りでは多種多様な工芸品の老舗が存在し、町全体が「工芸の五月」一色に染められている。



まつだ左官の仕事
松本市美術館でも職人や建築家の方々を招いて、クラフトフェアを通じて、まちと芸術、建築と職人などを中心に様々なイベントが開催されています。



▲ 昔から使われている民芸家具工房



街路が城下状態のままの所が多く、狭い道路や歩車分離がなされていないところも多かったです。いずれも山の背景が強く、見通し景観としての山が印象的でした。(中井)

蔵の井戸
「水」に恵まれている松本のまちでは、清らかな湧き水や井戸など随所があり、まちに潤いをもたらしている。



▲ 外国人観光客の案内
民芸家具工房の前で、倉澤さんが地元の住民と会い、外国人観光客に道を聞かれて案内し、二人の英語はべらべらでした。聞けば二人とも留学経験があったようです。



左官のような職人仕事は継承者問題に悩まされてきました。それに対して、企画展にはある言葉借りると、「五千年前から左官はいた。たかが4~50年でなくなるとは思わない。長い歴史の中で、自分がぶち当たる壁は誰かが絶対ぶち当たって越えたはず。」実に考え深い言葉だと思います。(王)





倉澤聡さんの歩みと思い

The Works of Mr.Satoru Kurasawa

5/2、倉澤さんの案内のもと松本でまちあるきをした後、工芸の五月の会場の一つでもある池上邸蔵にて、倉澤さんにインタビューしました。倉澤さんには、今の仕事やその意義、進路選択に関して詳しくお話いただきました。倉澤さんの松本や仕事に懸ける情熱に圧倒されていると、瞬間に時間は過ぎていき、インタビューが終わった頃にはすっかり日も沈んでいました。(編集：M2 今川)

＊

—それではさっそくですが、携わった仕事について教えてください

まちづくりの構想を作ったり、学習の場を設けたり、実際に街に仕掛けたりと、都市計画や都市デザインを行うために必要な環境を創っています。今は松本市の都市デザイン戦略支援アドバイザーや都市政策の仕事、イベントでは工芸の五月全体の企画・交通対策・運営などを行っています。他にも物産展の改革や地域デザイン産品講座、都市計画や都市デザインの講師、ワークショップをしたり、一杯やっついて何だかよくわからない(笑)

—いろいろやっていますが、職業は？

自分では都市デザイナーではなく都市計画家と名乗っています。制度的な都市計画だけでなく、まちを意図して、まちに暮らす人や働く人が主体的にいいまちを創っていく、それが成り立つ環境を創ることが都市計画だと思っています。その意味で、まちの人がまちのことを考える土壌づくりがまず重要だと捉えていて、地元の人々の中に入ってコミュニケーションをとりながら、将来を構想し考える人達を今まで増やしてきました。

NPO 法人松本クラフト推進協会の理事もやっています。クラフトやものづくりの環境をどう良くしていけるか、使い手・受け手をどう結び付けるのかといったことを、松本という場を意識しながらクラフトフェアや工芸の五月を通して行っています。

松本には、民芸運動があったし、クラフトフェアも30年以上続いているし、ギャラリーもいっぱいある。でも、横の繋がりがあまりなかったの、そこをつなげて松本のまちの力に工芸を使っていこうと7年前から携わっています。

—工芸の五月とクラフトフェアの意義は？

クラフトフェアは、クラフトマン同士と、

クラフトマンと使い手の二つのコミュニケーションを作るという目的があって、ただ単に賑やかになればいいとは思っていない。見たり買ったりするだけではなく、コミュニケーションのきっかけになって、それがものづくりに反映されればいいなど。

クラフトフェアはクラフトマンが始めたある種のお祭りだけど、工芸の五月はギャラリーとか工芸のお店の思いを繋げるように、横の繋がりを作って、工芸を通してまちを面白くすることを意識して始めました。

クラフトフェアの渋滞問題が深刻になって、以前は迷惑だからまちを出て行って空港近くの公園でやれといわれていた。でも7年くらい前から松本市も少し変わってきて、まちなかだからこそ泊まったりまちを楽しんでくれるので、そのためのインフラを考えるべきだということで渋滞対策と一緒に考えることになり、この危機をきっかけにマイナス志向ではなく工芸のまちづくりにつなげるよう、松本市も一緒にやっていくことになった。

—結果として行政は良いまちづくりを目指す

ことに積極的になったということですか？

プラスの効果は非常にあった。ただ賑わいを作って人が来るようにするというところだけじゃなくてより本質的に都市やまちとは何か問うようになった。工芸の五月がコミュニケーションのツールになって行政の中でも面白い動きがちらほらできたり、まちの人たちの意識も変わり始めたところがある。

—松本市の方で都市デザイン室に近いものが出来そうってききました

都市政策課の中に都市デザイン係が出来た。松本都市デザイン学習会をつくって数年間講座やまち歩きをして色々な人が関わりながら、市に対して提案してきたことも一因となって、都市デザインが大事だと思ってくれる行政の人たちがまずはということできた。景観係はあったけど、都市デザインは景観だけでは語れないから、それとアクティビティをセットで考えていく。行政の中でもやる気がある人がいて、「松本での都市デザイン」がなんとなくわかり始めた時期。これが



M2 今川、高橋、M1 王、富田、中井、砂塚、川田でお話をお伺いしました。

ら都市デザインの動きを着実に育てていきたい。

—アートをまちづくりにどう活かせる？

僕はアートでも景観でも受け手の感性が大事だと思っています。作り手側の質の向上、アーティストの価値を生み出す能力も大事だけど、キャッチボールしても良い受け手がないと、アーティストが刺激を得て創造することが難しくなってしまう。良い町並みを作るときも同じで、良い受け手がないとできっこない。今は受け手の感性が弱いと感じていて、作る側だけじゃなくて受け取る側の感性や価値観をどう育成していくかが都市デザインや都市計画にとってすごく大事だと思っています。そのためには投げかける方もやっぱりいいものを作らないと次を見てもらえない。それが都市デザイナーや都市計画のアートだと思っています。

—学生時代はどんなことをしていましたか？

デザイン研にいるときは研究室のプロジェクトはそんなにやってなくて、活動を外に出していきました。日本設計でバイトして

色々な調査を実践的に学ぶことでインターンみたいに勉強してました。そのうちに長野のコンサルの人に松本で街並み環境整備事業をやらぬかと誘われて、地元でフィールドが出来ました。馴染みがある所で、でも実際に調査してみると色々なことが見えて来て、そういう中で学んだことが大きかった。僕自身は都市工のプロジェクトにそれほど関わらなかったけど、横でみながらすごい刺激を受けていました。

—その後なぜパリに行かれたんですか？

高校の時にフランス人の親友がいたり、クラシック音楽や向こうの文化に興味があったのでパリで暮らしてみたいと、色々な国の人と出会いたかった。それに日本に比べてまちが魅力的だと感じていたし、都市計画を勉強するうちに、フランスの都市計画がしっかりしていると思ったことも大きな理由。

—学生時代やパリ留学が、倉澤さんの今にどうつながっている？

デザイン演習はプランニングの基礎が学べて凄く勉強になった。そこで初めて都市的な

プロジェクトを仲間と考える経験をしたんだけど、西村先生や日建設計の人から指導を受けながら、紙の上や模型として表現していく中で、街を見る目が変わったのだと思う。都市のユーザー的な感覚から、都市を構想し創る側の視点を持てたのが大きかった。都市工や建築の授業はあまりとっていなかったけど、いろいろな分野に対して興味があって美術史や仏文などの授業を受けて、単位としてはそっちの方が多いかもしれない(笑)。

パリでは交通と持続可能な発展というパリ土木学校やポリテクニクのマスタープログラムに入って、ロジスティクス、広域交通、都市交通、自動車など交通に関する幅広いことを学びました。都市計画関連の授業はごく一部だったけれど、様々な分野の教授や、行政の責任者などが授業してくれて、授業の後や市役所で話を聞いたり、カリキュラムの外で都市計画や都市デザインを学びました。

あとはまちの人がパリをどう楽しんでいるかを感じたり、色々な国の人と対話することで、自分の頭の中の世界観や想像力に反映させていくことが大事だと思いました。生きた都市というものをちゃんと読み解いたり構想したりする力を養うのに、パリにいた時代はすごい役立っています。

—その後なぜ松本へ？

東京を出てパリに一年半暮らして、本当はあと三年は居たかった。フランスの都市計画エージェンシー、シンクタンクで勉強したくて。各地の都市圏にあるんだけど、結局インターンの空きがなくて帰ってきた。

じゃあなんで松本かっていうと、生まれ故郷というのが一つかな。松本で生まれて松本で育った。お世話になった人もいるし。今日は山が見えたと思うんだけど、都市から見る山が綺麗で、そういう都市があったらいいなと思っていた。マンションが建って山並みを失ってみて初めて、意図して綺麗にデザインするのって大事だと思った。それが都市デザイン研に入った一つのきっかけだったし、松本だったらそういうことができるんじゃないかなと思った。

ここでパリでも東京でもない、松本っていう都市デザインが出来るんじゃないかなと思った。そこに暮らしている人が誇りを持てる、他のまちの人も松本でなんかやってみたいよっていう都市にできるんじゃないかなと思って。

日本でやるなら松本だなと。

ーシンクタンクとかコンサルとか職能があるなかでなぜ確立していない分野に？

今は、都市デザインや都市計画を本質的に考えて実践する人が日本にはすごく少ない。それで色々と考えていた時に、コンサルの人が松本のプランニングの仕事を投げかけてくれるようになって、僕は毎回かなり時間かけてリサーチしたり、行政の人と協議しながら、プランを立てていた。だけど、そんなに時間をかけるとコストが掛りすぎるし、プランニングの価値を理解し、そこに見面とお金を出す行政もほとんど無い。時間やコストの面で、会社でできることって限られていて、コンサルではいい仕事が出来ないと思った。「本当は社会の役に立ちたいのに、いい仕事できていないな」と経営層も現場のコンサルももどかしい想いを持っていることも多い。

それでレールの上に乗るのではなく、**違うやり方を模索した方がいいんじゃないかと思って**、市の委員会に参加してみたり、コンサルの仕事でも、力不足なことも多いけどなんとか出来る範囲でいいものを作ろうと本気で取り組んでいた。そうしていると、いろんな人を見てくれて、工芸の五月やクラフトフェアの渋滞問題の相談とかが飛び込むようになった。そんな風に自分で仕掛けていくとチャンスが飛び込むようになって、それで実績を積んでいくと、こういうことは大事だからと、お金を払って仕事にしようという流れになってくる。こんなことを繰り返していくと、都市計画とか都市デザインの分野で何をすべきかがちょっとずつ見えてくるんじゃないかなと思って。

あと、みんなも魅力的なまちってこうだ

なって構想したりすると思うんだけど、簡単に出来ることも、そこにいきつくまでのプロセスが実に難しいけど大事。ちょっとずつ仕掛けながら一步一步実績積んでいけるプロセスを自分でデザインできると結果的に社会の人にも認められるビジネスや仕事になっていくと思っています。

松本市は去年、都市デザインアドバイザーとして初めて予算つけてくれて、個人に委託を出すというのは非常に珍しいことだと思うけど、幹部の人たちが都市デザインの可能性を理解して相当頑張ってくれたのだと思う。そういう事例が増えるほどみんなが活躍する場が広がると思う。まだ今は都市デザインや都市計画の職能自体が認められていないので、これは僕が頑張らなきゃいけないことだと思っています。**学生が卒業して、活躍できる、成長できる仕事を作るのは大事な僕のミッションの一つです。**

ー最初に都市デザイナーではなく都市計画家というふうに入ったのはなぜですか？

僕は大学で経営システム工学を専攻して、数値解析やシステムダイナミクスを学んだので、統計を扱ったり、データを見ながら中長期を考えたりもするから、デザインもするけどプランナーだと思っている。都市計画は中長期的に都市を良くすることに軸足を置いて、そのための都市やまちを意識したアクティビティづくりと空間形成は都市デザインだと考えていて、互いに相補関係にあると思っている。

僕たちは、都市デザインとか都市計画って職能を持つのであって、建築家ではない

し、商業者でもない。敷地を与えられ求められる機能や要素から形を作るためにお施主さんとやりとりする人材ではなくて。建築家は敷地の空間を価値あるものにする立場だけれど、都市デザイナーは面的にシナジーを生むような良い相互作用を及ぼしてまちや都市を価値あるものとする事を考える。そういう意味で、建築家がモチベーションをもって取り組める環境をどう作るか、それも都市デザインじゃないかな。

ー発注する側の能力も問われている？

まさにその通りで、例えば行政は、コンサルタントにいい仕事をしてもらう能力をいかに持てるかが問題。良いコンサルは、互いの頭の中を掘り起こしながら、良い仕事をしたがっている。ただ、そういうことを発注できる人、マネージメントできる人がいないと良い仕事はできない。これは行政の組織・意識改革も必要だから、一筋縄ではいかないけど、そういった組織力を鍛えること自体、僕らの仕事かもしれない。コンサルに仕事をしてもらう目的（なんのため、なぜか）を深く意識して、いい仕事に導くために**コンサルをマネージメントできる能力が本当に大事**だと思う。

とはいえ、都市のプランニング経験を相当積まないとそういう発注者になれない。行政は3~4年で異動するし、幅広い専門性を鍛えたプロフェッショナル的な人も少ない。都市デザインについても教育環境や素養を鍛える機会がなかなかないので、分からない中で頑張ってる勉強して仕事をしているのが実情。これから根本的にキャリア形成や人材育成の

方針を変えない限り、良いと思われる仕事がスタンダードに出来ない。今は行政がこれではいけないと気づき始めている時期。

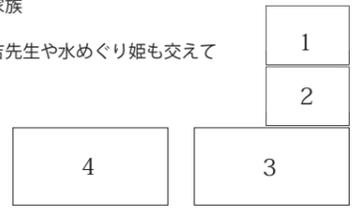
ー行政の組織を変えるにはボトムアップがいか、枠組みの中で活動するのがいいの？

両方必要。システム思考という言葉があるんだけど、構造やパターンを読み解きながら因果関係やそのフィードバック関係を把握し、システムとして捉える。システム思考で考えると、システムの挙動を考えられるようになる。そういう風に組織と組織の関係している外の環境をシステムとして考えてみれば、両方が必要だと思う。

行政の中だけで考えれば、国、住民に近い市、町のような基礎自治体レベル、それぞれにしかできないこともある。基礎自治体を見れば、地域の人、民間企業との関係、議会との関係、内部にも縦や横の関係がそれぞれにあって、それぞれの関係性や構造を読み解いて、やりたいことややるべきことに対して、行政でも民間でも個人でもいいからシステムにおけるリバレッジになり得ると感じたところで活動していけばいいと思う。

行政の仕事の質を高めるには、シンクタンクも大切だと思う。日本には、都市政策のために役に立つ継続的なリサーチをしたり、分析や検証をしているところがほとんどない。個人的に出来る限りはやっているが、それには限界がある。都市政策には、様々な領域で専門的なリサーチや分析、検証を継続的にやっていくことが必要で、そういうことができる都市を魅力的にするための制度や施策について、行政や議会、市民の間でも健全な議論ができるわけだけど、今の松本にはない

1. 二日目見学 - 松本城にて
2. 二日目見学 - 黒瀬助教とその家族
3. 二日目見学 - 水そばの会で国吉先生や水めぐり姫も交えて
4. 工芸の五月の一会場にて





インタビューは工芸の五月の会場で行われました。

からまずはそのようなシンクタンクに必要な役割を担える人を集めたい。今あるデータでさえ、活用されていないのが松本の現状だけだ。

TMO という失敗事例が多いけど、行政が機能するためには本質的にはまちづくりのマネジメントの会社は必要だし、本当の意味でのコンサルティングができることも必要。足りないことが多すぎてどこから手をつけられいいのかということもあるけど、今の地方都市にはどれも必要で、これらは着実に作っていく必要があると思う。

シンクタンク機能を外に置かか中に置くかという問題もあるんだけど、行政がプロフェッショナルを育てずに3、4年で異動させることを基本とするなら外に作る必要があるし、そうじゃなくて、専任として例えば5年や10年契約で、そういう職能をもった人を雇えるようにして、行政の中に作るという考え方もある。フランスの行政には、例えば都市政策や交通政策のスペシャリストがいて、任期付きで民間から入れることもある。それとは別にシンクタンクもちゃんとある。

これから本当に地方として自立して政策を作るということを大事に考えるとしたら、事務屋、技術屋だけじゃダメで、行政の中にも政策屋、計画屋と呼ばれるような人たちも絶対必要で、松本でもそんな人たちを行政の中でも育てるのが大事だと投げかけています。

—官僚組織の縦割りに少し疑問があります。たしかにそうだけど、大きい組織になる程、縦のラインがしっかりしないと混乱してし

まう。でも、意思決定は縦が大事だけど、意思決定にのせるシナリオ作りや、プランを出すとき、選択肢をつくるときは横のつながりや外の人の力を連携させることが必要。そこは国も地方も民間企業もうまくいっていないところが多くて、組織のスタッフとラインの役割をあまり認識していないんだと思う。組織ってなにか目的があるから人が集まって連携する場だけれど、硬直化すると目的が深く共有されなかったり、本当の目的よりも組織の決まり自体が目的化してしまう、だから疑問に感じてしまうんじゃないかな。

最後の意思決定はもちろんトップが下さないといけなけれど、そのプランをつくる前の段階が大事。計画を作るとき、例えば、都市マスを作らなければならないことが前提となってしまう、**そもそものなぜつくるのかという目的は深く語られない**ことが多い。つくるという意思決定をする以前の議論をしっかりとやるべきだということ。プランを立てる前の事前準備こそが、今のプランニングに一番欠けている部分だと思います。

—松本市以外の自治体の方との情報交換などのやりとりはあるのですか？

まだ沢山ではないが、いろいろやっていると、やっぱりいろいろ繋がりができてきます。横浜の国吉さんも、はじめは講師として、都市デザイン学習会の講座に来てくれて、ちょっと市役所の若手に刺激を受けてほしいなと思って横浜へ連れて行ったりすると案内してくれて。工芸の五月のようなイベントを仕掛

けていると、来てくれることもあったりして、いろいろとアドバイスしてくれる。

昨日も、京都の人から神戸のこの行政マンとつながった方がいいから連絡するよとか、そういうふうにも他都市の行政の人とつながって、勉強させてもらって、アイデアを互いに掘り起こせる関係になればいいなと。で、なんで大事かという、行政マンはやっぱり行政マン同士だと反応が違うんですよ。民間だと、自分たちと違うように見えてしまっても民間でいいことやっているねというくらいだけど、**同じ行政のひとが色々やっていると、結構刺激があって動く部分がある**から、そういう関係性を作りたい。

あとは海外の人とももっと行政同士で繋がりをもってもらいたいなとおもいます。ヨーロッパだと、都市間でどんどん情報交換しあっているから、調査の質も高いし都市のリサーチのプレゼンテーションなんかもすごくうまいし、都市のデータなんか職員の人みんなかなり読み解いて共有している。日本ではあまりそれができていない。都市マスなんか結局コンサルが5年毎に基礎調査をやるだけで、計画にしっかり活かしているとは言えない。本当は調査や分析は意思決定やプランニングや施策に活かすためにやっていると、活かされてない。そういう基本的なところはなんとか変えたいなと、市の中の人とも話しています。

—まちに対する受け手の感性を具体的にどうやって育てていくのですか？

動きが必要だね。ワークショップ・講座と

いったまちを問いかける機会や、本・パンフレットに興味を持ってもらったり、イベントでもいいから実体験をつくって意識をもってもらうことが大切だと思う。そして、目指していく方向を共創したり共有してもらいながら、実例としていいものを作っていくこと。例えば、横浜だったら、都市デザイン室が目指すことを発信しながらすき公園をデザインしていいと言われる公園をつくる。で、いいと思うと「ああいいね、うちもこういうことをやってみたい」となって、次は国吉さんに相談して馬車道が動いたわけだね、馬車道の次は伊勢崎モールや関内が動いて、関内になると、もう自分たちでデザイナーを探してやるから（国吉さんは）みてよというくらいになってまちが主体的に動いていく。

あと、日本にもいい事例はいっぱいあると思うけど、事前にこういうことを考えてこういうことをやろうとしますよ、というプロセスの部分から知ってもらいながら良い実例を作っていくと、全然受け手も反応も違ってくるよね。つくるプロセスを多くの人に体験して**つくるプロセス自体をなんとか理解してもらおう**とか、そういう仕掛けが大事じゃないかな。

—自分の街を知ることによって好きになって、もっと主体的にまちづくりに参加する人も増えると思います。地元の子もたちはどうですか？

徐々に子どものまちづくりへの参加を増やそうとしてはいるけど、まだしっかりできてない。高校生は今年から広げていきたいんだけど、小学生は街歩きをしたり、中学生は美

術部とかで好きな風景などをスケッチしながら、街を読み解く力、街の楽しさを見つけるきっかけなどを作っています。高校生は大事で、大学行く前に、自分の街や都市をなぜ好きなのか嫌いなのかを感じて、じゃあ自分が何を学びたいのか、社会出て何をやりたいのか、そこと進路をつなげて行って欲しい。街の面白さを見つけるきっかけづくりを早くやりたいなど。でも実際問題、高校生が街中で滞留しているかといえば、ほとんど滞留していない。高校生がああだこうだ話し合ったり、将来のことを話したり、遊んだり、そういう場があんまりないのかなと。

—これからの展望は？

これまでは、時間もお金もなく自分の組織ができなかったんだけど、それじゃ良くないんだよね。一人だけでやっていると、仕事がかんたん増えて自分も疲弊しちゃうし、自由なアイデア・自由な発想をするためには、頭を休めたり、遊びの時間ってすごい大事で。そういう時間を自分でつくるためにも、いい仕事をもっと多くするためにも、若い人たちを育てるためにも自分で早く組織をつくらなければいけないと思っています。アーバンデザインセンターみたいな場をつくって、こうなったら良いよなって発信ができたり、人や情報が集まったりと、まちの魅力を創造するために必要な人がつながるきっかけとなる場も作りたと思っています。

—最後に、同じ都市を携わっていく後輩の皆に先輩としてメッセージをお願いします。

いろいろ視野からもものを見る、都市という

多様なものや主体からなる生き物のようなシステムを読み解ける力をつけて欲しいと思っています。今みんながやってるようなことって行政や企業に入ってもなかなかできないですよ。都市デザイナーとか都市計画家とかみんなが一番力を発揮できる**職能が、本当は行政でもすごく求められている**。でも、働く受け皿がないという矛盾をどうにかしないといけな。自分でも受け皿をつくる努力をする。先人たちが投げかけてくれたものを巧みに活かしながら仕事をして、価値を感じてもらって、ビジネスにしていく。ビジネスにしないとやっぱり広がらないしそもそも生きていけないから**そういう投げかけを社会にでも続けて欲しい、都市デザインができる環境自体を育ててほしい**。そうすると、日本のいるんなまちが良い方向に変わっていくだろうし、建築家や色々な職業の能力がさらに引き出せる。都市デザインにかかわる人は、様々な職能をつなげるためのインタープリターのな人材だと思っているので、色々な人と一緒にまちの魅力をたくさん生み出して欲しいと思っています。

*

倉澤さん、お忙しいところ貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました！

Information

5月のウェブ記事

新旧ミックスの雰囲気魅せられる
三國祭調査 その1
神田祭 400年の歴史を全身で感じる
是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

6月の予定

6/4 研究室会議
6/6 神田 千代田まちづくりサポート審査会
6/8 マガジン インタビュー
6/26,28 佐原 佐原高校文化祭
6/24,29 研究室会議

編集後記

王 誠凱

倉澤さん、この度は、本当にありがとうございました。松本社会科学見学・倉澤さんインタビューの中で、これからどうやって都市を見ていくのか、そして関係者をいかにうまくまとめ上げるという都市経営的なアプローチなどについて大変勉強になりました。

また、個人的な話になりますが、今回はじめてマガジンの仕事を担当させていただきました。作業自体は大変でしたが、これからも精進して、読む関係者の皆さんに「都市やまちと関わってよかったな」と思えるような面白いマガジンを作れば幸いです。



▲左から M1 川田、M2 今川、高橋、倉澤さん、国吉先生で集合写真

